

On-line 開催資料

富士学会発表要旨集

富士学会 2023 年秋季学術大会

2023 年 11 月 26 日 (日)

会場：静岡大学 (On-line)

富士学会

2023

富士学会 2023 年秋季学術大会プログラム

日 時：2023 年 11 月 26 日（日）

11 時 00 分 開 会

16 時 40 分 閉 会

開 催：リモート開催（ZOOM）

会 場：静岡大学（リモート開催本部）

静岡大会会長 増澤武弘（静岡大学）

大会実行委員長 徳岡 徹（静岡大学）

目 次

11:00～11:05 開会挨拶 渡邊定元（富士学会会長）

【基調講演】

11:05～12:00

『富士山大沢崩れにおける土石流の発生・流下特性』

○今泉文寿（静岡大学学術院農学領域）

池田 敦（筑波大学生命環境系）

12:00～13:00 ー 昼休憩 ー

【研究報告】

座長 徳岡 徹

13:00～13:20

(1) 富士山の可視性と天気の関係：32 年間の観測データに基づく解析

石川涼之佑（沼津工業高等専門学校）

渡邊巧真（沼津工業高等専門学校）

河合陽杜（沼津工業高等専門学校）

井上美乃里（富士市総務部企画課）
鄭 萬溶（沼津工業高等専門学校）
○鈴木静男（沼津工業高等専門学校）

13:20～13:40

(2) 『常陸国風土記』筑波郡考 —福慈の語りと筑波の語り—
長谷川豊輝（沼津工業高等専門学校）

13:40～14:00

(3) ツバキ科における生殖器官の解剖学的形質の進化の解明
○高木美菜（静岡大学理学部生物科学科）
徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科）

14:00～14:20

(4) 狩野川におけるメダケ樹林化の要因分析
○村山龍斗（静岡大学大学院総合科学技術研究科理学専攻）
徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科）

14:20～14:40

(5) 湖西市嵩山のフロラ調査
○浅野奈々（静岡大学大学院総合科学技術研究科理学専攻）
徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科）

14:40～15:00

(6) 大井川上流の植生—悪沢と蛇抜沢—
○渡邊誠太（大阪公立大学理学研究科/大阪公立大学附属植物園/NPO 法人静岡自然環境研究会）
村山龍斗（静岡大学大学院総合科学技術研究科理学専攻/NPO 法人静岡自然環境研究会）
増澤武弘（静岡大学防災総合センター/NPO 法人静岡自然環境研究会）
徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科/NPO 法人静岡自然環境研究会）

15:00～15:15 — 休憩 —

15:15～15:35

(7) 遠州灘斜め海岸林における林分構造について

○関口岳志（静岡大学防災総合センター）

増澤武弘（静岡大学防災総合センター）

15:35～15:55

(8) キク科における生殖器官の解剖学に関する文献レビュー

○Chauphaeng Thanatcha（静岡大学自然科学系教育部）

徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科）

15:55～16:15

(9) 富士山・村山道での山岳信仰

黒田洋一郎（日本山岳会）

16:15～16:35

(10) 鳥羽法皇の信仰と富士禅定

渡邊定元（森林環境研究所）

16:35～16:40 閉会挨拶

増澤武弘（大会会長）

※ 共同研究の場合、○で示した方が発表者となります。

【基調講演】

富士山大沢崩れにおける土石流の発生・流下特性

○今泉文寿（静岡大学学術院農学領域）

池田 敦（筑波大学生命環境系）

富士山斜面に位置する大沢崩れでは、凍結融解作用や降雨に伴い大量の土砂生産があり、崩れの底部に厚い堆積物が存在する。この堆積物が降雨時等に流動化することで、大規模な土石流やスラッシュ雪崩（雪代）が発生している。大沢崩れにおける土石流およびスラッシュ雪崩の発生条件と流下特性を明らかにするため、現地で地温の観測を行うとともに、降水量や航空レーザー測量によって得られた地形の解析を行った。本研究では、大沢崩れにおける土砂流出イベントを、1. 非凍結期・無積雪時に発生する土石流、2. 凍結期・無積雪時に発生する土石流、3. 凍結期・積雪時に発生する土石流の3つに分類した。その結果、大沢崩れにおける土石流およびスラッシュ雪崩の発生条件には地盤の凍結が大きく関わっており、凍結期の土石流およびスラッシュ雪崩の発生降雨条件が、非降雨時の降雨条件よりも明確に小さいことが明らかとなった。Degree-day法によって地盤の凍結の有無を推定可能であることも明らかになった。凍結時に発生する土石流やスラッシュ雪崩は、比較的小規模な降雨においても、大沢崩れの下流に位置する大沢川の河床の土砂を侵食し、発達をしながらさらに下流の大沢扇状地に到達する傾向がみられた。このことは、凍結期に発生する土石流・スラッシュ雪崩が流れの内部に大量の水を有していることを示している。その一方で、非凍結期に発生する土石流の一部は、大沢崩れの内部から土砂の堆積を開始させ、大沢扇状地に到達する前に停止をした。つまり、非凍結期に発生する土石流の一部は、流れの中の水が乏しいことを示している。これらの土石流（スラッシュ雪崩）の発生・流下特性は、凍結に伴う地表面付近の浸透能の変化に大きく影響されていると考えられる。凍結期には浸透能が低下するため、地表流が谷底に集中をしやすい、水を多く含む土石流（スラッシュ雪崩）が発生をしやすい。それに対し非凍結期には、地表面の浸透能が高く、降雨のほとんどが地中に浸透するため、土石流を発生させるために必要な降雨条件が高くなり、また水が乏しい土石流が発生をしやすい。

研究発表要旨

会 場：静岡大学（リモート開催）

開催日：2023年11月26日（日）

(1) 富士山の可視性と天気の関係：32年間の観測データに基づく解析

石川涼之佑（沼津工業高等専門学校）

渡邊巧真（沼津工業高等専門学校）

河合陽杜（沼津工業高等専門学校）

井上美乃里（富士市総務部企画課）

鄭萬溶（沼津工業高等専門学校）

○鈴木静男（沼津工業高等専門学校）

富士市役所では、1991年から32年間にわたって毎日8:00, 12:00, 16:00の3回、庁舎から富士山が「見えた」「一部見えた」「見えなかった」の三段階が記録されています。加えて、その日の天気も記録されています。これらのデータをもとに富士山の見え方を年比較、月比較、日比較、時比較しました。また、富士山の見え方と天気のカテゴリカルデータを指標化することで、これらの関係の解析も行いました。

1年366日（閏年8回）の各日において、32年間（2月29日は8年間）の平均を求めたところ、1月1日における富士山「全て見えた」割合が60%を超えており、1月から7月に進むにつれてその割合が減少し、7月2日は0%になりました。7月から12月に進むにつれ再び「全て見えた」割合が上昇しました。富士山が「全く見えない」は、「すべて見えた」と逆の傾向を示しましたが、6月から8月の期間は「一部見えた」の割合も低くなりました。

天気と富士山の可視割合を時間帯別に調べました。晴れの日8時、12時、16時において、「全く見えない」の割合は、それぞれ20, 28, 35%でした。雨の日8時、12時、16時において、「全て見える」と「一部見える」の合計割合は、それぞれ10, 13, 18%でした。これらのことから、晴れの日でも見えないことがあり、雨でも見えることがあるとわかりました。

今後は、気象データ、天気予報データ、天気図等と組み合わせることで、機械学習による数日後の富士山可視性予測モデルの作成を予定しています。

(2) 『常陸国風土記』筑波郡考 — 福慈の語りと筑波の語り —

長谷川豊輝（沼津工業高等専門学校）

本発表は『常陸国風土記』における発話部分の分析を通じて、当該風土記における記述の論理の一端を明らかにするものである。

『常陸国風土記』筑波郡の記事には、神祖尊をめぐる福慈岳（富士山）と筑波岳（筑波山）のやり取りが載る。神祖尊が日暮れに際して宿を依頼したところ、富士山は「新粟新嘗」による「諱忌」（物忌）を理由にその依頼を承諾せず、対して筑波山は物忌の禁忌を破り飲食物を用意してもてなし、以降人々が筑波山に集るようになったとの内容である。

当該記事については折口信夫以降、禁忌を破ったはずの筑波山が厚遇されるということの意味を中心に研究が重ねられているが、地誌としての位置付けそのものについては検討の余地を残している。本発表では、山（神）が発話するということをめぐり如上の問題に就いてみたい。

風土記における発話の問題をめぐっては、地域の言葉がどのように地名にあらわれているか、あるいは天皇を始めとした中央の人々がそれをどのように捉えたかという方向から研究が行われてきた。しかし、それぞれの風土記において果たして自由な発話がなされているのか、会話が成立しているのかについての分析は行われていない。当該記事の問題としてこれを換言すれば、なぜ富士山や筑波山の発話が地誌において記述可能であったのかの分析はなされていないということになる。

本発表では如上の問題について、地域の人々や神が実際に発話を行っている部分について次の手順で分析を行う。

- ①発話主体とその相手
- ②発話がどのような記述で導かれているか
- ③発話の内容はどのような語で記されているか

以上の分析を通じて、『常陸国風土記』における発話が天皇による統治を示すものであること、加えて他の国との関係性において当該地域を示そうとしていることを明らかにする。その上で、相対的に地域を示すに際し富士山という共有知が利用される意義を明らかにしてみたい。

(3) ツバキ科における生殖器官の解剖学的形質の進化の解明

○高木美菜（静岡大学理学部生物科学科）

徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科）

富士山の山地帯には広大なブナ林が広がっている。このブナ林ではブナ、ミズナラ、イタヤカエデなどとともにツバキ科ナツツバキ属 3 種(ナツツバキ、ヒメシャラ、ヒコサンヒメシャラ)が優占している。最新の分類体系(APGIV,2016)ではツバキ科はツツジ目の中程に位置しており、9 科を含む大きな単系統群と姉妹群となっている。科内の分類ではナツツバキ属のみからなるナツツバキ連と、タイワンツバキ連(3 属)、チャノキ連(5 属)に分類される。近年の分子系統解析により、チャノキ連とタイワンツバキ連が単系統群を形成し、それぞれの連内の属間、種間の系統関係も明らかになっている。一方でツバキ科内の生殖器官の解剖学的形質はチャノキ連、タイワンツバキ連のみ明らかにされており、葯隔からの偽花粉の形成、薄層珠心、珠皮が 2 枚、珠皮の維管束が内珠皮または外珠皮に通ることなどが報告されている。しかし、ナツツバキ連についての生殖器官の解剖学的形質はまだ明らかにされていない。本研究ではナツツバキ連を対象に生殖器官の解剖学的形質を明らかにし、ツバキ科内の形質の進化を明らかにすることを目的とした。

天城山内に生育するヒメシャラの蕾から成熟した果実の段階までを FAA で固定し観察の材料とした。これらを通常のパラフィン切片とし光学顕微鏡で観察した。また、珠皮の維管束の有無を確認するために、透明標本を作製し光学顕微鏡で観察した。

その結果、葯隔からの偽花粉の形成、薄層珠心、珠皮が 2 枚、珠皮が表皮由来などで、ツバキ科 3 連が共通していた。一方、珠皮に維管束がない、タデ型の胚嚢形成様式、倒生胚珠などが他 2 連と異なっていた。これらの結果から、珠皮の維管束は通っていないことが原始形質であり、チャノキ連・タイワンツバキ連でそれぞれ外・内珠皮に通るように進化したと考えられた。また、胚嚢形成様式はタデ型からチャノキ連でネギ型へ、胚珠の形は倒生からタイワンツバキ連の一部の属で湾性胚珠へとそれぞれ独自に進化したと考えられた。

(4) 狩野川におけるメダケ樹林化の要因分析

○村山龍斗（静岡大学大学院総合科学技術研究科理学専攻）

徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科）

狩野川は伊豆半島の天城山系を水源とする一級河川であり、その下流域は狭窄部が多く、多雨地帯を流域に抱えることから、昔から洪水が多発していた。昭和 40 年に洪水防止の要として狩野川放水路が完成し、台風や大雨の対応として年平均 2、3 回のピークカットを行っている。また、治水対策の一環で放水路の下流では、高水敷掘削や樹木伐採などにより堤防や河道内を定期的に整備しているが、一方で河道内のメダケによる樹林化が進んでいることが報告された。河道内の樹林化は、河川の流下能力の低下だけでなく、河川景観の低下、治水問題などの様々な問題となっている。現在、狩野川では伐開や除根等の手法によりメダケの管理を行っているが、根茎残渣や近傍群落から再繁茂しやすいなど、適切な管理手法が確立されておらず、効果的な管理方法を明らかにすることが求められている。そこで本研究では、狩野川中下流域におけるメダケ群落の分布を調査し、その生育特性を明らかにすることを目的とした。

狩野川中下流域において、徳倉橋―修善寺橋間の約 19km を調査範囲とし、範囲内に生育するメダケ群落を現地調査等で記録した。メダケが分布する地点において Unmanned Aerial Vehicle（以下、UAV）による写真撮影を行った。UAV 機材は、Mavic 2 Pro（DJI 社製）を使用し、得られた連続写真からオルソ画像を作成し、メダケ群落のマッピングを行った。

調査範囲（徳倉橋―修善寺橋間）において、メダケが分布する計 47 地点のオルソ画像が得られた。今回得られたメダケ群落の面積と地理院地図の航空写真（2013 年）の群落面積を 1km 区間ごとで比較した結果、河口 22-23km 地点を除き、すべての区間で群落が拡大していることがわかった。また、現地調査やオルソ画像から、メダケ群落は川の流れが急なカーブの外側や砂州が安定しない中州などの河道内条件が悪い環境に群落を形成していた。メダケが分布する箇所では、土砂堆積指標や無次元掃流が高い地点が多いことが明らかとなり、メダケ群落は河床変動が活発かつ土砂が堆積しやすいような環境に群落を形成している可能性が示唆された。

(5) 湖西市嵩山のフロラ調査

○浅野奈々（静岡大学大学院総合科学技術研究科理学専攻生物科学コース）

徳岡 徹（静岡大学理学部生物科学科）

嵩山（すやま）は、湖西市に位置する標高 170.7 m の山である。静岡県と愛知県の県境を走る弓張山地の南末端ピークであり、浜名湖県立自然公園に属している。生物地理学的には、美濃-三河地域と襲速紀地域（前川、1977）の境となる地域である。嵩山周辺には、静岡県の天然記念物トキワマンサクの群生地がある。この湖西市の群落は、種としての分布の北限となる重要な群落である。しかし現在、嵩山周辺では「浜松湖西豊橋道路」という高速道路の建設案が浮上している。また、嵩山の詳細な植生はまだ明らかになっていない。そこで本研究では、嵩山のフロラリストを作成し植生の特徴を明らかにすることを目的にフロラ調査を行った。

調査の結果、採集なしの 2 点も含めた 344 点の植物を確認し、そのうち 340 点を同定した。木本 118 種、草本 132 種、藤本 20 種であり、シダ植物は 10 種であった。また静岡県レッドデータブックに掲載されている希少種は、ハスノハカズラとトキワマンサクの 2 種であった。学名表記は Ylist（米倉・梶田、2003-）に従った。

嵩山全体にはシイ類が優占する照葉樹林が広がっており、ヒメユズリハ等の海岸性植物もみられた。嵩山では美濃-三河要素の植物はみられなかったが、襲速紀要素（杉本、1984）の植物が生育していることから、襲速紀要素の影響を強く受けている地域であると考えられる。外来種は 38 種で、全体種数の 14% にのぼった。外来種は、登山道入口、車道脇、トキワマンサク群生地の下の湿地に特に多くみられた。また各所で、国内外来種であるアオモジが確認できた。アオモジが群落を形成している箇所もあり、今後懸念される分布拡大への対策が必要である。

北側の岩地にはハイネズが生育していた。愛知県では、やや内陸に生育しているものはネズミサンとハイネズの雑種とみられるオキアガリネズであるという見解がある。嵩山に生育するものがオキアガリネズであるかを判断するため、ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵のハイネズ標本（愛知県伊良湖岬にて採集）と形態比較を行った。識別には「若枝の太さが有効」（レッドデータブックあいち 2020）とことから枝の太さを電子ノギスで計測した結果、比較を行ったすべての部分で太さの差は 1 mm 未満となり大きな差は見られなかった。したがって、嵩山に生育しているものはオキアガリネズとは言えず、ハイネズとすべきである。

(6) 大井川上流の植生 — 悪沢と蛇抜沢 —

○渡邊誠太 (大阪公立大学理学研究科/大阪公立大学附属植物園
/NPO 法人静岡自然環境研究会)

村山龍斗 (静岡大学大学院総合科学技術研究科理学専攻/NPO
法人静岡自然環境研究会)

増澤武弘 (静岡大学防災総合センター/NPO 法人静岡自然環
境研究会)

徳岡 徹 (静岡大学理学部生物科学科/静岡大学大学院総合科
学技術研究科/NPO 法人静岡自然環境研究会)

大井川は、静岡県の農業・生態系を支える重要な河川であり、その流路は約 170km で、南アルプスの 3000m 級の高山である間ノ岳から生じる。この南アルプス周辺の大井川上流部は、高標高にも関わらず平地や河岸段丘も見られる一方で、広大な崩落地や氾濫原も普通に存在する。著者らは、2014 年から大井川上流の天然林の構造を把握するために、周辺の調査を行ってきた。今回の対象地である悪沢と蛇抜沢は、大井川の支流の一つであり、柳島という安定した平坦地の南北に位置するが、その環境は多様で、岩塊、崩落地や高湿度の土壌も存在する。そこで、本研究では悪沢と蛇抜沢の植物相の実態を明らかにするために、植生調査と毎木調査を行った。その結果、悪沢には 80 種の維管束植物（シダ植物 4 種、裸子植物 3 種、被子植物 73 種）が生育していた。悪沢では、低木層にコメツガの稚樹が優占し、カラマツなどの中低木層が多くて高木層が少ないことから、悪沢の調査区は極相林への遷移段階といえる。一方、蛇抜沢には 72 種の維管束植物（シダ植物 1 種、裸子植物 4 種、被子植物 67 種）が生育していた。蛇抜沢では、悪沢とは違い、構成樹種が少なく、先駆的樹種のヤナギ類が中木層に発達していたことから、悪沢よりも短期間に更新が起きている可能性がある。また、両沢では共通して高山性の植物が観察され、定期的に氾濫しつつ上流から流れ着いていることが示唆された。また、これまでの著者らの調査結果と比較してみると、悪沢と蛇抜沢は大井川上流部の他の植生と共通した種を含みながらも、それらの構成種は異なっていた。これは両沢が多様な環境を有する一方で急峻な滝を含む狭い沢であることや氾濫期間の程度などが関係していると思われるが、今後の研究の進展を待ちたい。

結論として、悪沢と蛇抜沢は大井川上流の代表的な河畔林の構成種や高山植物が複数見られ、実生や稚樹が多く観察されたことから、天然更新が起きている貴重な天然林であることが明らかになった。

(7) 遠州灘斜め海岸林における林分構造について

○関口岳志（静岡大学防災総合センター）

増澤武弘（静岡大学防災総合センター）

我が国において、従来、海岸林では海岸環境でも生育が良好なクロマツが植栽されており、富士山世界文化遺産の構成資産として登録された「三保松原」のように、人々の生活や文化的活動の場となっている。一方で海岸林は、防風、防砂、防潮等の防災機能も担っているが、クロマツ林はマツ材線虫病（松枯れ）の防除や、土壌貧栄養化のための林床管理を継続的に行う必要があり、費用や労力の面からコストが大きいことが課題となっている。このため、海岸林への導入樹種はクロマツ以外の広葉樹についても検討が必要だと考えられているが、海岸林への広葉樹の導入については不明点が多く、導入技術の確立に向けて研究が進められている段階である。そこで本研究では、遠州灘斜め海岸林において、林分構造を調査することで、今後の広葉樹海岸林造成の一助となるよう検討を行った。

調査は遠州灘斜め海岸林において道路等で分断されていない海岸林を1調査地として区分し、調査地ごとに8～10m×10～15mの調査区画を設置し、調査区画内の木本種について、樹種、胸高直径、樹高を記録した。なお、調査地は丘状になっており、丘の海側と山側では植生が異なっていたため、海側と山側に分けて調査区画を設置した。

海側で5区、山側で4区の合計9調査区で調査を行った結果、個体数は、海側ではウバメガシ、トベラ、エノキ、クロマツが多く、山側ではヤブニッケイ、ネズミモチ、ヒメユズリハが多かった。これらの種の多くが、宮脇ら（1987）によって行われた潜在自然植生の構成種と一致していた。胸高段面積が大きい樹種は、海側でエノキ、山側でクスノキであった。また、同じ樹種でも汀線から離れるほど、樹高が高い個体が多く分布する傾向が見られた。

本調査の結果から、遠州灘斜め海岸林のように丘状構造の海岸林においては、地域の潜在自然植生を参考に、海側ではウバメガシ、トベラ等の耐塩性のある低木種、海側では、ヤブニッケイ、ヒメユズリハ等の高木種を主体とした群落を目標とすることで、広葉樹林の造成が可能であることが示唆された。また、海岸林に十分に防災機能を発揮させるため、汀線から近い場所では、防風垣等の設置により樹高成長を促す必要があることが示唆された。今後の課題として、遠州灘斜め海岸林での調査地を増やすことで、海岸広葉樹林の造成について、より詳細な考察を行うとともに、県内他地域にも同様の調査を広げていくことで、地域に適応した持続可能な海岸広葉樹林の造成について検討を進める必要があると思われる。

(8) キク科における生殖器官の解剖学に関する文献レビュー

○Chauphaeng Thanatcha (静岡大学自然科学系教育部)

徳岡 徹 (静岡大学理学部生物科学科)

富士山にはフジアザミをはじめとして多くの種類のキク科植物が生育している。被子植物の中で最大の科であるキク科にはおよそ 1620 属 25000 種が含まれ、被子植物全体の 1 割を占めるに至っている。このような大きな科の分類には多くの研究者が携わってきたが、近年の分子系統解析の結果から、13 亜科 42 連に分類され、その類縁関係についても明らかにされた。一方、生殖器官の解剖学的形質を扱う、いわゆる embryology についてキク科でも多くの研究例が報告されている。しかし、それぞれの embryology の形質について、どのような形質進化をしてきたのかを議論されたことはない。そこで、これまでの研究をレビューし、キク科における embryology の知見がどの程度蓄積されているのか、科内の分類やその進化を明らかにするために有用な embryology の形質は何なのかを明らかにすることを目的として研究を行った。

これまでに報告された 114 属、24 連のキク科植物に関する 217 報の embryology の研究を調査し、embryology に関する 36 形質についてその形質状態を調べた。

その結果、葯壁が 4 細胞層からなること、エンドテシウムが繊維状肥厚すること、倒生胚珠で薄層珠心を持つことなど、25 の形質について科内で均一な形質状態を保持していた。しかし、それ以外の 11 の形質で科内に変異が見られた。キク科内で珠皮の維管束の有無について変異が見られたが、キク科と近縁なミツガシワ科、クサトベラ科、カリケラ科にも珠皮に維管束が見られたことから、珠皮に維管束を持つことがキク科における原始形質であり、キク科内のハハコグサ連などの 5 連で維管束をそれぞれ失ったと考えられた。また、葯壁形成様式が双子葉型であることはコウヤボウキ連からギンケイソウ連までの大きな単系統群で共有派生形質となることが分かった。反足細胞由来の胚乳吸器が形成されることはキクニガナ連から *Tagetes* 連までの単系統群の共有派生形質であることも明らかになった。その他、タペート細胞の形態、成熟花粉の細胞数、胚乳形成様式、無融合生殖の有無などの embryology の形質についてもその進化の議論を行った。

(9) 富士山・村山道での山岳信仰

黒田洋一郎（日本山岳会）

富士山の登山道としては、今は使われていないが、古くからの道として「村山道」がある。村山道（むらやまみち）は、富士山信仰の拠点である村山の興法寺（現在の村山浅間神社）を東海道から目指す、江戸時代後期に設定された。富士山信仰の実態としては、先ず麓の本宮「富士山本宮浅間大社」を出発した修験者たちが、まず目指したのが村山浅間神社だ。修験道の中心地であり、多くの修験者たちが来訪した神社だ。明治時代におきた仏教の抑圧・排斥をする「廃仏毀釈運動」までは、興法寺という寺院がここにあった。つまり、神と仏がこの同じ場所で祀られ「神仏混交」していた。修験者の中で最も有名なのは、村山修験の祖と言われる末代上人です。末代上人有鑑は、1103年（康和5年）駿河国の生まれ-没年？）、平安時代の僧で村山修験の祖。富士上人とも呼ばれた。彼は富士山に数百回も登頂したといわれ富士山頂に大日寺、村山に神仏習合の富士山興法寺を創建し、村山修験の基礎を築いた。

修験の拠点としての“村山”の歴史：鎌倉時代には、末代上人の意志を継ぐ修験者によって、富士山興法寺を拠点とした村山修験が盛んに行われた。その後数百年の間、村山には、多くの修験者や登山者が訪れ、村山三坊（大鏡坊・池西坊・辻之坊）と呼ばれる立派な宿坊が建ち並び、東西の見付で集落への出入りを取り締まるなど、富士山興法寺を中心に修験の集落として栄えていたようだ。現存するのは、興法寺は境内に本堂である大日堂、末代上人を祀る大棟梁権現、そして浅間神社が中心となった修験道の寺院であったが、明治時代以降は村山浅間神社が中心となる。以前、私が村山浅間神社で撮った写真を紹介する。

幕末から明治時代には数人の外国人も富士山に、ここ村山道から登った。ラザフォード・オールコック他、原著「富士山に登った外国人―幕末・明治の山旅」山本秀峰編；山本秀峰、村野克明訳；露蘭堂2012年、参照、なおサー・ラザフォード・オールコック(Sir Rutherford Alcock)は、イギリスの医師、外交官で、初代駐日総領事、同公使を務めた。

(10) 鳥羽法皇の信仰と富士禅定

渡邊定元（森林環境研究所）

富士山世界文化遺産として現在登録されている構成資産は、荒ぶる神の山として畏怖された浅間信仰と、長谷川角行を開祖とする室町時代末期以降の富士講信仰関連資産に限られ、1083（永保3）年の富士山火山活動が一時休止状態となったのを契機として、富士山信仰が「遥拝」から「登拝」へと変わっていった院政時代の構成資産は、山頂部を例外として皆無といつてよい。鳥羽法皇による御願寺（実相寺）を建立して行った富士禅定は、国家による撫民のための行事・信仰であり、室町期以降の民衆が行った富士講の信仰とは峻別すべきものである。18巻に記した演者の「世界文化遺産未登録の実相寺に関する萌芽的研究」は、限られた文献資料からどこまで読み解くことが出来るかについて、本朝世紀1149（久安5）年に記す鳥羽法皇の富士禅定に関する記述を用いて解析が可能かを提示したものである。本報は、実相寺を世界文化遺産構成要素として登録するための研究を一層深めるため、上記の萌芽的研究の主旨に即して鳥羽法皇の信仰と富士禅定について論ずるものである。

富士学研究の新たな課題は、実相寺、田子の浦、富士禅定古道など、400年にわたる神仏習合時代の未登録遺産を文化遺産構成要素として登録するのに加えて、自然遺産、更には複合遺産登録に係る基礎研究を深化させることを目的としている。

鳥羽法皇の履歴：1103 立太子、1107 鳥羽天皇踐祚、1118.12 御願寺最勝寺供養、1123 鳥羽天皇讓位（崇徳天皇）受禪、1129.7 白河法皇没、鳥羽上皇院政を継承、1141.3 鳥羽上皇出家、1142.5 鳥羽法皇、東大寺と延暦寺で受戒、1145 鳥羽法皇御願寺実相寺建立、1147.6.18-24 法皇・上皇延暦寺臨幸、1149.4.16-5.13 6.29 鳥羽法皇の富士山納経、1156.7 鳥羽法皇没

鳥羽法皇の宗教行事：①熊野参詣、②畿内臨幸、③洛中御願寺、④天王寺参詣 ①-③は公的行事、④私的行事。

鳥羽法皇信仰の特徴：当時の神仏習合した宗教世界で総ての仏教を信奉する。授戒は国家鎮護の寺の東大寺。

富士禅定御願寺 実相寺の信仰上の位置づけ：富士禅定に関する記述は、本朝世紀のなかでも特異な存在である。実相寺は、①国家祈願 ②法皇個人祈願（聖徳太子御本尊）の両面を有する。

2023 年度富士学会秋季学術大会 研究発表要旨（リモート開催）

2023 年（令和 5 年）11 月 26 日 発行

編集・発行：富士学会

〒418-0061 静岡県富士宮市北町 19-23

TEL：080-8889-3724

Mail：office@fujiology.jp

URL：http://www.fujiology.jp